

研究ノート

バリの風土と家系についての考察 (VI)

松原正道

序

今回は、ヨーロッパにおける大航海時代の先駆となったポルトガルの海外進出、その舞台としてのアジア、特に、バリ（島）が属するインドネシア地方へポルトガルがどのように関わりを持つようになったかを中心に考えた。

ヴァスコ・ダ・ガマ Vasco da Gama (1469頃-1524) のインド航路開拓 (1498) に始まるポルトガルのアジア進出は、ゴア Goa 総督アルブケルケ Affonso d'Albuquerque (1453-1515) によるマラッカ Malacca 攻略 (1511) を機に東南アジア一帯に展開されることになり、香料諸島の香辛料を始めとする物産をヨーロッパへもたらしたのである。

ポルトガルの海外進出には物資の流通の確保と共に、キリスト教の世界布教という使命があった。

そのために、身の危険をも省みず聖職者達は海外へ出かけて行ったのである。そこには、プロテスタント Protestant の台頭に対するカトリック Catholic の行った反宗教改革運動の動きがあり、その代表的人物としてザビエル Francisco de Xavier (1506-52) がいる。

彼は、ゴア、マラッカを中心にして東南アジア一帯で布教活動に従事、その後、来日し、キリスト教を伝えると共に各地で布教活動を展開するのである。こうして、日本にもキリスト教が根づくことになるのだが、やがて、それは、日本の在り方を根底から覆すものであるとして、禁止されることになり、終いには弾圧という形をとることになるのである。

翻って、東南アジア、特に、インドネシア地方では、交易と表裏一体となったキリスト教の浸透が顕著で、今日、この辺り一帯がイスラム教の世界であるという様相を呈する中でキリスト教、それもカトリック信者も多数見受けられ、それはヒンドゥー（バラモン）の世界であるバリ Bali（島）においても例外ではない。ここにもザビエルの影をみる思いがする。

一方、オランダ初の渡来者が、その初航海でバリ（島）にも来訪しているということは興味深いものがある。

今回は、やがて、この地域一帯を植民地として支配したオランダの進出について、その端

緒をなしたハウトマン Cornelis de Houtman (1599没) の渡航から始まり「東インド会社」による支配の確立過程と、それに伴うこの地方に存在した政権との関わりについて考察を試みてみた。

1.

九州のキリシタン大名によって派遣された「天正少年遣欧使節」の通過をその滞在中に知り、それについて、「ヤパン（日本）から3人のプリンスすなわち王子が、イエズス会士らを伴ってゴアに到着した。かれらはイエズス会士と同じ服装をしており、年齢はせいぜい15、6と見受けられた。（王子らがヤパンを発ったのは）イエズス会士の膳立てによるもので、その意図するところのものは、ポルトガルに渡航してローマへ上り、教皇に謁見してイエズス会のために大きな利益、特権および自由を獲得すること、ただそれだけが目的であった。ゴアには（15）84年まで滞在した」⁽¹⁾と記しているオランダ人リンスホーテン Jan Huyghen van Linschoten (1563-1611) は、時の世界貿易の中心地リスボア（ン）Lisboa（n）を経て、ポルトガルのアジアでの拠点ゴアで、ポルトガル人大司教の下で書記として働いていた。

勤務の傍ら、同地方を始めアジア、特に、東南アジアの地理、物産、民族等について研究し、ポルトガル人のアジア経営と東方航路貿易に関する情報・資料の収集に努め、帰国（1592）後、それを *Reys-geschrift van de navigatien der Portugaloyers in Orienten, Malacca, China, Japan* (1595) および *Itineratio, voyage ofte schipvaert naer Oost ofte Portugaels Indies* (1596) という形で著わし、当時、未だ知られることの少なかったアジア諸地域の場合や、その地域におけるポルトガルの活動についての情報をオランダに知らしめることとなったのである。

そこでの彼の記述は詳細を極めたもので、特に、アジアにおけるポルトガル人の活動については、同国人ピレス Thomé Pires (1524没) の *Suma Oriental que trata do Maar Roxo ate os Chins*⁽²⁾ と共に、ヨーロッパ人のアジア進出期の活動を知るうえでの貴重な史料といえるものである。

中でも、それらの地域の土地、住民、物産について、特に、ポルトガル人によるキリスト教の強制と圧政に対する住民の憎悪や反感と、それが故のポルトガル人勢力が意外と脆弱だったというその様子等を詳述しているのである。

それ故、著述の公開を機に、オランダのアジア、特に、東南アジアへの関心が高まり、それはやがて、同地域を巡っての先行者ポルトガルとの確執を生むことにまで発展するのである。

オランニエ Oranje 公ウィレム Willem 1 世 (1533-84 統領在位79-) は、その信任をえて神聖ローマ帝国 Heiriges Römisches Reich Deutsche Nation 皇帝カール Karl 5 世 (1500-58 在位1519-56) からオランダ3州（ホランド Holland、ゼーラント Zeeland、ユトレヒト

Utrecht) の総督に任ぜられ (55) たが、翌年、カールが退位して王国を子供達に分け、フェリペFelipe 2世 (1527-98 在位56-) がスペイン王となり、ネーデルランドを植民地として受けつぐことになった。

彼は、スペイン中心の考えの持主で、ネーデルランドの貴族を軽蔑、財政改善のためとしての重課税、そして、カトリックの保護者を以て認じているためプロテスタントProtestantの多いネーデルランドで異端審問を厳しく行った。

このため、ウィレム1世を中心に独立運動が展開され、「80年戦争」といわれる独立のための戦いが始まり、1581年には独立を宣言し、1586年頃からは武器をとって戦う。

独立のための戦争は海外にも波及、1580年、王家の断絶から、母の出身であるポルトガルの王をフェリペが兼ねると、オランダはポルトガルをも相手にしなければならなくなり、それは、単に、海外進出の競争相手というだけでなく敵対する国同士ということとなり、そのためその争いは熾烈なものとならざるをえなかった。

リンスホーテンの出版と機を同じくしてハウトマンCornelis de Houtman (1599没) の活動が始まり、それがオランダ人によるアジア進出の嚆矢となるのである。

アムステルダムAmsterdamの商人の要請により、アジアにおけるポルトガル人の活動の実状、特に、東インド航路に関する情報や海図を手に入れるためにとリスボア(ン)に派遣された彼は、数々の情報をえた後帰国、その後、商人達が出資してつくった「遠国会社 ファン・フェーレCompanie van Verre社」が編成したアジア貿易のための4隻の船隊の指揮官としてオランダを出発するのである。

Nederland(低地)という名前の国内の自然条件から、オランダ人は、早くから漁撈、海運、貿易に従事、リスボア(ン)においてポルトガル人がもたらしたアジアの物産を買入れ、これをヨーロッパ各地に供給するということをしてきていた。

スペイン、ポルトガルとの関係から、オランダは独自のアジアへの新航路開拓を計ってきたのだが、結局、これを果しえずに終り、そのために、「ポルトガルが多年にわたって開拓した喜望峰廻りの航路をそのまま利用する形となった」⁽³⁾といわれるように旧来の航路をとってアジアへ向ったのである。

1595年4月、アムステルダムを発ち、北海に面したテクセルTexelで船団を集結させた後、同地を出発したハウトマンの一行は、喜望峰到達後は、インド洋のポルトガル勢力をさけるため、マダガスカルMadagascar島北部から真直ぐ東北東に針路をとり、6,000キロメートルのインド洋を横断してガマをはるかに越える長い航海の後スマトラSumatra(島)とジャワJava(島)との間のスダSunda海峡に達し、ジャワ島西岸のバンテンBanten港に錨を降ろしたのである(1596・6)⁽⁴⁾。その時、そこには6人のポルトガル人がいたという⁽⁵⁾。

バンテンの人々に友好的に迎えられたハウトマンの一行は、そこに商館を建て、土地の者

(3)

を相手に貿易に従事するが、これこそ最初にアジア到達に成功したオランダ船隊であり、オランダの東方貿易開設の端緒をなしたものとなったのである。

だが、当初、友好的だったポルトガル人の策謀や感情の行き違いから争乱となり彼らは捕虜になってしまい、賠償金を払うことで釈放されたのである。

その後、同年11月、スンダ・クラパSunda Kelapaとして知られ、ジャコトラJakatraともいわれたジャカルタJakartaに到着、当時は未だ、特に見るべきものがなかった同港だったのでポルトガルも同地を軽くみていたため、両者の間には特に問題が起こることもなく終始した。そのため、オランダ側も性急に事を運ばなかったため、大した利益をえることもなく、他のジャワ諸港へ立ち寄った後、バリBali（島）まで行き胡椒等少量の積荷をえて97年8月にテクセルへ戻る。

このことから、バリ（島）は、オランダ人のインドネシア地方への初来航の時からオランダとの関わりを持っていたことが分る。彼は、バリについてその航海記の最後の所で、「王の下にはキロールと称する総督がおり、ポーランドの大顧問官のように、王から全権を委ねられて全島を統治する。そして、この総督の下に多くの領主がおり、それぞれ王の名において所領を治める」⁽⁶⁾とその統治体制について述べている。

この航海で船隊は、一隻を失い249人いた乗組員も89人となり、失ったものの大きさに比べ得たものは殆どなかったが、オランダ初の東方進出であったため、その後の歴史を考えると画期的な出来事だったといえる。

だが、こうしたアジア航路開拓者としての立場をえたハウトマンだったが、更なる東インドへの航路の途次、スマトラ（島）北部のアチェーAtjehにおいて、土地の人間との間のトラブルにより殺されるのである。

こうしたハウトマンのアジア航路開拓に刺激を受けたアムステルダムAmsterdam出身のネックJacob Cohwelissoon van Neck（1564-1638）は、アムステルダムに設立された貿易商社⁽⁷⁾の船8隻を率いてネーデルランドを出航（1598・3）、ハウトマンと同じコースをとり、6ヶ月後ジャワ（島）のバンテンに到着、ポルトガル人と交戦中のバンテン王国に援助の手をさしのべ、そこの土侯に執政マウリッツMaurits, Graat van Nassau（1567-1625）の国書と進物を呈し、友好裏に交易を行い、胡椒等の豊富な積荷をえて帰国（1600）。その中の一隊は、モルッカMoluccas諸島まで航海し、テルナテTernate（島）に商館を建てた後、同じく成功裏に帰国（同年）⁽⁸⁾。「このファン・ネックの航海の利益は400倍にも上ったといわれている」⁽⁹⁾といわれるもので、この旧会社は1600年までに4回の航海を行い、1598年、ロッテルダムRotterdam商人の出資した5隻の船隊がマヒューJacques Mahu（1564-1698）の指揮でマゼランMagellan海峡を経て東インドへ向い、風波の難やスペインの妨害によって、唯一隻イギリス人航海長アダムズWilliam Adames（1564-1620）の乗ったリーフデLiefde号の

みが、1600年4月、船体を激しく破損させて、豊後の臼杵湾に漂着した。これが、日本とオランダとの初めての接触であり、以後、江戸時代を通じ、日本はオランダとのみ西欧との通商を行うことになるのである。アダムズはその後、徳川家康（1542-1616）に仕え、三浦按針と称した。

次いで、ネックは同じ年に再び6隻の船隊を率いて東インドへ向い、翌年バンテンに到着、大泥（パタニ Patani マレー Malay 半島中南部）に赴き、そこに商館を建て、1602年、帰国する。



オランダ商館跡（長崎県平戸）



オランダ商館跡 商館模型（長崎県平戸）



三浦按針（ウィリアム・アダマス）の墓（長崎県平戸）

この間、この旧会社は、1599年、ネーデルラントの商人が設立した「新ブラバント会社」と1600年に合併して、「アムステルダム東インド会社」と名前を変えていた⁽¹⁰⁾。

彼は、その後、アムステルダムの市議会議員や、しばしば市長に選ばれる等要職につくが、彼自身が経験した航海の記録は、いずれも帰国後直ちに出版されると共に版を重ね、その後のオランダのアジア貿易に大いに資したのである。

東インドの物産をリスボア（ン）においてバルト海での商品と交換していたオランダであったが、ポルトガルを併合したスペインが高圧的となってきたため、東インドとの直接貿易の気運が高まり、そうした中から、「アムステルダム遠国会社」Companie van Verreが設立され、こうした雰囲気の中でのハウトマンやネックの航海で

あった。もっとも、ネックのそれは、1597年に設立された「新航海会社」Nieuwe Companie van Verreと「遠国会社」Companie van Ferreとが合併してできた「旧会社」Oude Companie



ポルトガル船入港の地（長崎県平戸）



イギリス商館跡 (長崎県平戸)

(「東インド会社」に対して) と呼ばれる会社での航海であった。

その後の新会社設立と合併の経緯を経て旧会社と新ブラバント会社が合併して市当局からアムステルダム商人の東インド貿易の独占権を付与された「アムステルダム東インド会社」が設立されると、引き続きホランド、ゼーラント、アムステルダム、デルフト Delft 等にも約10の「東インド会社」が濫立することになる。

このため、仕入れ価格は高騰するが、一方では小売価格の下落をもたらす⁽¹¹⁾等各東インド会社は企業の不利を招いていた。そして、何よりも先行のポルトガル、スペインと対抗する観点から統一をする必要性を痛感、そこで、これらの諸会社は、1602年、議会の斡旋のもと、V・O・Cをマークとし、「合同東インド会社」という形で統合され、

「オランダ東インド会社」が設立されたのである。

だが、そこにはこれまでのいきさつからホランド州とゼーラント州の確執があった。とはいうものの、会社は先行のイギリスの「東インド会社」(1600)をはるかにしのぐ資本を擁するものであった⁽¹²⁾。その結果、「オランダ東インド会社は、ポルトガル、スペインの勢力と争い、さらにイギリスと戦いながら香辛料貿易の独占をはかり、東南アジアに大きな勢力圏を築く」⁽¹³⁾ということになるのである。

こうして設立されたオランダの「東インド会社」は株式会社の起源とみなされるのだが、現実には、母体となった諸会社を単位とするカーメル、即ち、部屋の意味を持つ6つの支部の集合体で、各カーメルに所属する60人で構成される取締役、そして、そこから選ばれた「十七人会」Heeren XVIIが会社の実権を握っていたのである。そして、先きの「アムステルダム東インド会社」設立のいきさつから、経営基盤を担うカーメルは、アムステルダムの商人に優先権が認められ、そのため、「十七人会」はそれぞれの出資額に応じてメンバーの数が決められており、アムステルダム8人、ゼーラント4人、残りの4カーメルから1人ずつ、そして、アムステルダム以外のカーメルのグループから輪番で1人ずつ選出し構成されていたのである⁽¹⁴⁾。

「東インド会社」という会社ではあったが、それが持つ権限、力は大きなもので、それは、条約の締結、軍隊を持つての自衛戦争の遂行、要塞の構築、貨幣の鑄造等の権限を与えられ、オランダ国内では単なる特許会社にすぎないにもかかわらず、喜望峰を過ぎれば国家に等しい力を持つと共に、その力を行使しうる地域は、「喜望峰の東、マゼラン海峡の西」という広大な範囲のものであり、それは、主として先行のポルトガル・スペインの勢力打破を意図としたもので⁽¹⁵⁾、その目的はほぼ達成されたといえる。

こうした国家の如き力を持つ「東インド会社」ではあるが、社員や軍人は国会に忠誠を誓い、敵対者に対しては、できるだけ損害を与えることを要求され、国会は会社首脳陣の任命権を保持していた⁽¹⁶⁾。

先行のポルトガルは王統の断絶からスペインのフェリペ2世を国王として戴くことになるが、この先行の2国に対するオランダの海外進出についての対策は、「連合王国の勢力の及んでいない所を、またもう一つはそのアキレス腱をねらうことであった」⁽¹⁷⁾というものであり、そうして狙った所が、北米であり、ポルトガルが細々と守っていたマラッカ、ブラジルだったのである。

1602年、ネックの初航海の時の副官だったワールワイク Wjbrand van Waerwijck が率いる15隻の船団が喜望峰を回り、セイロン Ceylon (スリランカ Sri Lanka) を経由、この地域の中心拠点としてバンテンに商館を開設して社員を常駐させ、更に、マライ半島パタニに寄港してここにも商館を開設、ジョホール Johore 沿岸でポルトガルの船隊を撃破、マカオ Macau の奪取には成功しなかったが、1607年、帰国するまでには豊富な積荷をえていた⁽¹⁸⁾。

1604年、ハーフェン Steven van der Hagen が13隻の船団を率いて東インド各地を巡航、オランダがこの地域で初めて領土を手に入れたことになるアンボイナ島に城塞を築き (1605)、ポルトガル人が領有していたティドール Tidore 島、テルナテ Ternate 島等香辛料の主産地モルッカ Moluccas 諸島を征圧する。だが、ここは一時期スペインに奪いかえされたこともある。

その後、ヨンゲ Cornelis Matelief de Jonge のマラッカ攻撃 (1606)、カールデン Paulus van Caerden の香料諸島を巡ってのスペイン人との抗争を経て、フェルーフ Pieter Willemsz Verhoeff の航行があり、マラッカ攻略という初期の目的を果すことはできなかったが、カリカット Calicut の土侯と交易の取りきめを行いコロマンデル Coromandel 地方の貿易の促進、ジョホール Johore のスルタン sultan と手を結ぼうとしたがポルトガルの影響が強く不調に終わったので、バンテンに入港する (1609)。

この間、フリフーン Griffioen とパイレン Roode Leeuwmet Pijlen の二船を日本に派遣して平戸に商館を開設し、その後の定期的往来の端緒を築いた (1609)。

従って、「オランダ人の勢力は東インド会社設立後7年にして、南アジア各地の海岸地方

から遠く日本にまで拡大して行った。その商館もインドの西海岸ではグジャラット Gujarat, ウィングラ Wingula, 東海岸のマスリパトナム Maslipatnam, ペタポリ Petapoli, テガネパトナム Teganapatnam, バリアカッタ Paliacatta, インドシナ半島のパタニ, シヤム, ジャワ島北岸バンタン, ジャパラ Japara, グリセ Grisse やモルッカ諸島のアンボイナ, バンダ, ティドール, テルナテなどの島々にも開設されて貿易はいよいよ拡大発展した⁽¹⁹⁾といわれるのである。

1609年9月、「東インド会社」はその勢力の発展を更に強力におし進めるために総督を任命し、初代総督としてボット Peter Both が就任、レインスト, レアールと続き、4代目にクーン Jan Pieterszoon Coen (1587-1629) が就いた。

土地の者にとっては好ましくないが、その立場を押し進めて、歴史に一時期を画したポルトガルのアルプケルケ, イギリスのラッフルズ Thomas Stamford Raffles (1781-1826) と比較されるクーンは1607-10年アジアへの航海に参加したのを皮切りに13年に再来訪し、モルッカ諸島等でスペイン, ポルトガル勢力の駆逐に努めた。18年から翌年にかけて会社の要塞があったジャカルタがイギリスとバンテン王国との連合軍の包囲を受け、オランダは重大な危機に直面する。⁽²⁰⁾ クーンはモルッカ諸島からの艦隊を以て攻囲を解き、要塞と町を再建してこれをバタヴィア Batavia と命名し (1619), アジアにおけるオランダの根拠地としての体裁を整え、以後、20世紀に至るまでオランダはここを本拠にしてアジア経営を行うのである。その後、バンダ (島) に出征、同地の香料貿易のオランダ独占を成功させる。重役に就任するが、マタラーム王国との関係が悪化したため再び総督となり、度重なるマタラームの来襲を迎え撃つが、戦争中に病没する。

クーンが重役に選任された1623年には、アジアにおける列強の競争に関わる画期的な「アンボイナ事件」が起った。

イギリスの傭兵の日本人がオランダ商館の様子を窺っているのを不審に思ったオランダ商館長は、イギリス商館長以下全員を捕らえ拷問を加え、オランダ商館襲撃の自白をえて、イギリス人10人, 日本人9人, ポルトガル人1人を処刑したのである。

これは両国の外交問題となり、オランダは賠償金を払うことになるが (34), 最終的には第2次英蘭戦争後のブレダ Breda 条約 (1667) で結着をえて、以後、イギリスは香辛料貿易から手を引くと共に、ジャワ西部から撤退し、インド経営に専念することになる。

そして、1624年には船団を派遣して台湾南部を占領、安平 Ānping にゼーランディア Zeelandia 城を構築、対中国, 日本貿易の窓口を固め、1642年には北部台湾に拠っていたスペイン人を駆逐して全島の占領を完成した。もっとも、ここは、やがて、明臣で海商として活躍するが清で獄死する鄭芝竜 (1604-61) と日本人の妻、平戸の田川まつとの子供である鄭成功 (国姓爺 1624-62) が攻略し安平鎮と称した安平を中心に、孫の代に至るまで、清朝



鄭成功居宅跡（長崎県平戸）

に対する敵対勢力として抵抗、「イギリス東インド会社」と貿易したり、ルソン Luzon 島進出を計る等の鄭氏一族の根拠地としての役割を果たすのである。

「日本の鎖国態勢形成の前後は、南アジアにおけるオランダ人勢力の伸張発展した時代で、会社の黄金時代を現出した」⁽²¹⁾といわれたが、それは総督ディーメン Antonio van Diemen (1593-1645) の時代 (1636-45) であった。

中でも、16世紀初頭以来長年にわたってポルトガル人が拠って、そのアジア経略の根拠地としてきたマラッカを、ジョホールのスルタンの援助をえて、司令官カルテクターが封鎖、次いで大規模な攻撃を加えて、これを陥落させることに成功するのである (1641)。

ゴアとマカオを結ぶ重要な拠点であるマラッカの陥落はポルトガルの衰退を決定的なものとした。

一方、ディーメンは、タスマン Abel Janszoon Tasman (1603-59) とクワスト Hendricksen Matthijs Quast (1641没) をして太平洋上にあるという金銀島を探査をさせ、彼らはシャムから日本に向けて航行、小笠原、伊豆七島を認め、本土を望見するがそこで引き返す (1641)。

その後、タスマンは南航、タスマニア島とニュージーランド New Zealand 島を発見、ニューギニア New Guinea 島を、また、オーストラリア大陸と南極とが接続していないことを確認する。

そして、その後、フリースゾーン Marten Geritszoon (1647没) は、1643年、韃靼地方と金銀島探検のために出発、日本の東海岸を航行、十勝、色丹、得撫島でアイヌ人と接し、その風俗、産業を観察、更に、樺太に達した後台湾を経て帰航する。

以上、概観した如く、「東インド会社」の活動については、総督クーンによってその基礎

が築かれ、それをディーメンがより強固なものとし発展させていったといえる。

リンスホーテンの『東方案内記』の発刊以来半世紀、この間年々多数のオランダ船がアジアを始め世界各地に航海して、富を求めての交易を目的としながら未知の世界の探検・開拓に努め、オランダ人の輝かしい植民地貿易発展の基礎を固めていった。

そうした中、会社は香辛料貿易独占商社であるばかりでなく、はっきりと専制的政治権力者としてそれぞれの地域を支配して、過酷な誅求の及ぶ範囲を広げて、得た利益を本社に送るといった植民会社へ変容していった。

その一方では、東インド（諸島）の人々はその後の直轄統治時代と共に厳しい生活に追いやられることにはなるのである。

2.

1596年6月にバンテンの港に到着したハウトマンの一行を迎えたのが、当時、西ジャワに勢力を持っていたバンテン王国の人々であった。港市としてのバンテンは、「ムラカは、1511年にポルトガルに占領されてしまうが、アチェ、バンテン、ジョホール、パタニ、ブルネイ、マカッサルなどの諸港市は、その後も東南アジア地域のネットワークと東西世界とを接合する役割を担った」⁽²²⁾といわれる東南アジア一帯を巡る商業ネットワークの重要拠点の一つだったのである。

そして、ムラカ（マラッカ）がポルトガルに占領されてからは、これを避けて北スマトラのアチェーからスマトラ沿岸を經由して南下、スンダ海峡を抜けジャワ海に入るルートが使われることが多くなり、そのため海峡の入口に位置するバンテンは重要な寄港地だったのである。

従って、ハウトマンの航海もこのコースを経てきている。

当時のバンテンは、バンタム Bantam ともいわれ、北スマトラのパサイ出身のファラテハン Falatehan（年代不詳）がイスラムの教えを伝えに、ジャワ中・東部を支配していたヒンドゥー王国マジャパヒト Majapahit を滅ぼしたデマック Demak 王国にきて、国王バンゲラン・トレンガナの妹と結婚し、デマックの援助をうけバンテンやスンダ・カルパ（ジャカルタ）等を占領してデマックの一番王となり、しばらくはデマックの属国だったが、息子のハサヌッディン（在位1552-70）の時、同国より独立、バンテン王国（1527-1813）を設立し、南スマトラまで勢力を延ばす。

その息子モラナ・ユスフ（在位1570-80）の時、かつて属していたヒンドゥー国パジャジャラン Padjadjaran 王国を滅ぼし（1579頃）、ジャワを統一する。

従って、16世紀末、胡椒の産出港として都のバンテンには、ポルトガルの支配するマラッカを避け、諸国の商人が集って繁栄を極めており、そうした中でのハウトマンの来訪であっ

た。

その時の様子をハウトマンは、「6月22日、ようやくバンテン港の前のスダの海岸に来た。前方に、ジャヴァ人のプロー・パ〔ン〕ジャンすなわち『長い島』と呼んでいる、美しい緑の低い島が見え、そしてその北側に、ざっと70隻ほどの小型帆船が、遠目にはまるで林のように並んでいた。(聞くところによると)それはみな漁船であった。これを見ても、バンテンは非常に人口の多い大都市であることがわかる」⁽²³⁾と記している。

ハウトマン一行の来訪した頃のバンテン王国はスマトラ(島)のパレンバンPalembangと交戦中で、国王のムハンマド(1596没)はその中で戦死し、生後5ヶ月のアブドゥル・カディールが後を継いだのである。従って、幼王を補弼するために母方の祖父シェ・パテ(キ・パテ)がこれに当るが、彼は1602年に死に、跡を継いだ兄弟も日ならずして死んだ。彼らは総督(マンクブミMangkubumi)と呼ばれ、絶大な権力を保持していたが、その死は暗殺だったといわれるのである⁽²⁴⁾。

王宮においては、王を中心に貴族階級ともいべき王子および貴族という意味のバンゲランと呼ばれる人々、この中に王位継承者が含まれているわけだが、一方では、宮廷の兵士、護衛を意味するポンガワといわれる提督および海上のカピテン達が互いの勢力を保持していた⁽²⁵⁾。

バンテンの街は城壁をめぐるしており、王宮を中心に広場やモスク等付随する建物が並び、港市として重要な市場は街の東側に設けられていた。「ジャワ、スダ地方の都市の基本的構成からすると広場をはさんで王宮に相對した区域、つまり広場と海岸との間あたりが市場として適当な場所である。おそらく、もともとは城壁内部のどこかにあったのが、商取引がさかんになって手狭になり、郊外に移転したのであろう」⁽²⁶⁾といわれることから当時のバンテンが交易を中心に栄えていたことが知れる。

そして、そこには、商取引に従事する商人が沢山住んでおり、土地の者とは別に、外国商人がそれぞれの出身地に従って居住、それは、「東南アジアの諸国では一般に、ある特定地域の出身者はかたまってある特定の職業に従事することが多い。中国商人やインド商人が容易に現地社会の一員として受け入れられたのはこうした慣習があったからである」⁽²⁷⁾という指摘がなされる場所のものであり、アユタヤ王国の日本人町に拠った山田長政の例もこれに当てはまるといえよう。

そして、このインド商人、中国商人とは別に、西アジア、つまり、サラセンSaracenといわれるペルシア人、アラビア人、トルコ人等もバンテンにおいては重要な存在であった。特に、彼らはイスラム教の伝播の重要な担い手となったからでもある。また、マレー人を始めとした東南アジアや南アジア各地の出身者が商業のみならず他の職業にも従事、中でも、イスラム教徒のマレーの商人は富裕であったということで重要な存在であった。

その他に、ポルトガル人がおり、彼らは、貿易の相手としてだけではなく、鉄砲・火薬の製作者、供給者、およびそれらを操作する傭兵としても働いていたのである。

そうした商人達の活動についてハウトマンは、「バンタンでは日に三つの市が立ち、そこであらゆる品物を売るのである。その第一の市は、そのために指定された市の東側に近い大広場で開かれ、夜が明けるとともに、ポルトガル人、アラビア人、トルコ人、シナ人、キリン人、ペグー人、マラヨ人、ベンガル人、グザラテ人、マラバル人、アペシン人などさまざまな民族の、またインディエのあらゆる地域の商人が、そこに集まって来て取引する。取引は〔午前〕9時まで続くが、その時刻になると、かれらはそれぞれ思い思いの方面へと去って行くのである」⁽²⁸⁾と記している。

ハウトマンに続くネックもバンテンにやってきて、多くの積荷をえて帰国、その後、「東インド会社」はバンテンに商館を設け、ここを中心にして東インドの島々との交易ネットワークを形づくっていったのである。

ところが、イギリスが香料諸島で優勢になり、それは西部ジャワ、バンテンでもオランダを凌駕する勢いをみせるようになったため、オランダは次第にバンテンからジャカルタへと移り、永久的根拠地を築くことを考えるようになった⁽²⁹⁾。

この頃、バンテンもオランダ人を追放しようと様々な動きを示すようになり、その背景には東インド諸島を巡ってのオランダとイギリスの覇権争いがあるのであり、1618年、バンテン港のオランダ船がイギリスによって火を放たれ破壊されたため、総督クーンはジャカルタにあるイギリス商館を攻撃したが、数で劣っていたためオランダは、クーン自らアンボイナの艦隊を迎えに行くことになり、この戦闘に際しては、イギリスはバンテン軍の協力をえて攻勢に出ていたのである。

イギリス、バンテンの協力関係は両者の利害の相違からイギリス艦隊が退去したため解消、そこで、オランダはジャカルタをジャワにおける最初の占領地とし、ここに拠点を据え、オランダ民族のラテン名に因みバタヴィア Batavia と命名し、以後、インドネシアの独立に至るまでオランダのアジア支配の根拠地とするのである。

イギリスと協同してのポルトガルの追い落としは、マラッカの攻略 (1641) で成功したが、その後は、イギリスとの確執が激化、英・蘭両国の対立は、イギリス側についた現地の勢力に対するオランダの対応を厳しいものにする事になり、バンダ諸島の住民についてのそれは、その典型としてあげられる⁽³⁰⁾。

「マタラム王国と会社があまり親密にならぬよう、事毎に牽制し、またバタヴィアの東に位置するチレボン王国を通じて叛徒トルノージョヨを援助したりした」⁽³¹⁾というように、何かとオランダに対して抵抗しながらも、バンテン王国はオランダに抗し難いことを知り、これと妥協しつつ勢力回復を計ったが、アブドルファター Abdulfatah (在位1651-82) はマタ

ラム王国の王位継承を巡っての内紛をみて、かつてのバンテンの繁栄の再現を夢見て貿易振興策をとり、イギリスやフランス等に商館を築かせたりしてオランダに反抗した。

だが、この対オランダ積極策は、後継者問題でのトラブルからオランダに通じていた長子アブドゥル・カハル Abdul Kahav の反対に会い、1680年、王がチレポンに出兵しようとした際クーデターが起り、王子が即位しスルタン・ハジ Sultan Hadji となるが、王は復位し、以後3年間、父子は互いに争い、王は捕えられ、オランダ側に引き渡され、死ぬ。

以後、バンテン王国は事毎にオランダの干渉を受け、1808年、総督ダーンデルス Herman Willem Daendels (1762-1818) に対する反抗に敗れて、王国は「東インド会社」の直轄領に編入されることになる。

1580年代の末頃まで中部、東部ジャワに存在しイスラム教を奉じたマタラム Mataram 王国は、8世紀から13世紀まで続いた同名の国とは別のもので、マジャパヒト Majapahit 王国に仕えていた建国者セナパティ Senapati (?-1601 在位1582/74-) の時代、既に、中部ジャワの大部分を支配していたとみられ、その子パネンバハン・クラピアク Panenembahan Krapiak (在位1601-13) の時、ジョクジャカルタ Jakarta 南郊のコタ・グデ Kota Gude に王宮を造り、東方に領土を拡張しつつ文学の振興にも力を尽くす。その子スルタン・アグン Sultan Agung (?-1645 在位1613-) が即位、この頃からオランダはマタラム王国と接触をもつようになり、商館建設の約束をとりつける一方、共同でバンテンを攻撃することを約したが、スルタン・アグンの突然の方針転換から、王が、トゥバン Tuban やマドゥラ Madura 島を攻略し、都を南東部のプレレッドに移し、1625年、スラバヤ Surabaya を占領した後、矛先を西部ジャワに転じて、二度にわたってバタヴィア攻撃がなされることになるのである。(1628, 29) だが、これはマタラム王国軍の装備の不備と食糧の不足によって失敗する⁽³²⁾。

バタヴィア攻囲戦の失敗のためその方向を転じ、スラバヤ近傍のグレシク Gresik に拠ったスーナン・ギリ Sunan Giri の小国を滅ぼし、1639年には、ジャワ最東端の balanbangan 地方を征服して、バンテン王国等のある西部ジャワ以外のジャワ全土を領有することになった。そして、バリ(島)征服を念願して、1639年、遠征はするが、それは実現しなかった。

だが、その一方では度重なる征服事業のため、港市は荒廃、水田や灌漑設備が破壊されてしまったのである。

跡を継いだアマンクラット Amangkurat 1世(在位1645-77)は国内の反対派を一掃するために、しばしば大量虐殺を行うと共に、統治体制を整えるために中央集権化を計ったがうまくいかなかった。オランダとは友好的な関係を保とうと、1646年、平和条約が締結されるが、会社のジャワへの内政介入の口実を作ってしまった。

父をマタラム王宮で殺され、自らも身の危険を感じさせられたマドゥラ島の王子トルノジョヨ Trunojoyo (1649? -80) の反乱 (1675-79) に際して、王都プレレッドを追われ、オランダの保護を求めることになってしまい、王は渦中で没する。

以後、オランダは事ある毎にマタラム王国に介入することになると共に、王国も援助を求めるのである。

一時期、トルノジョヨに援助を約束したこともある王子のアディパティ・アノムがオランダ人の助けをえて即位、アマンクラット2世 (在位1677-1703) と称す。

彼は、「東インド会社」からの莫大な借金のため西部ジャワの肥沃なプリアンガン Priangan 地方や北岸のスマラン Semarang 等を割譲する共に、一連の条約を結び、貿易上の特権をオランダに与えた。

この間、王国を大きく揺るがしたスラパティ Surapati (? -1706) の乱が起る。

バリ (島) の奴隷だった彼は、オランダ軍の下で働いていたが、その差別的待遇に憤慨して逃亡、数百人の同胞奴隷の首領となり西ジャワのプリアンガン地方で盗賊行為を行い、会社の討伐軍に追われ、中部ジャワへ逃れる。王は、一時、彼を保護するが、オランダとの関係を気にするようになり、やがて、これを遠ざけたため、スラパティは東部ジャワのパスルアン Pasuruan に独立国を建てる。

アマンクラット2世の死によって即位しながら、第1次ジャワ継承戦争で2世の弟のパンゲラン・プーゲル Pangeran Puger がオランダの後押しで王位につきパクブウォノ Pakubuwono 1世になったため廃位されてしまったアマンクラット3世がこれに合流したため、スラパティはオランダ軍の追討を受けることになり、負傷して死ぬ。

2次にわたるジャワ継承戦争 (1704-08, 1719-23) により増々弱体化した王国の中で、会社の援助によって即位したパクブウォノ2世 (在位1726-49) は、1740年に始まった華僑暴動に乗じて一時会社に背くが、再び帰順、その代償として東海岸地方を会社に割譲する (43)。以来、王国は正式に会社の属国となってしまった。

同王は、王位継承の争いを憂いてマタラム王国全土を会社へ譲り渡そうとしたが、これに対し会社は子供のパクブウォノ3世 (在位1749-88) を即位させる。

先王の弟マンクブーミ Mangkubumi は王室から離れていたが、これを不服として新王のいとこマス・サイド Mas Said と組んで戦闘を開始し、ススフナン・パクブウォノの王号を称した。この第3次ジャワ継承戦争 (1749-57) は宮廷内の紛争では最も激しく、王都の争奪が繰り返されて勝敗が決まらず、会社が調停に乗り出し、55年の協定でマンクブーミがスルタン・ハメンクブウォノ1世 (在位1749-92) となり結着をみた。

一方、パグブウォノ3世はスラカルタ Surakarta に都してススフナンの称号を保つことができ、マタラム王国は二分され、更に、マス・サイドがパグブウォノ3世から領土を分けて

もらうが、それらは、やがて消滅していくのである。

結

以上みてきたように、ジャワ（島）の大部分は東インド会社のものとなったのである。

18世紀末にマタラムが、19世紀初頭にはバンテンが消滅し、ジャワ（島）は「オランダ東インド会社」の領有するところとなり、ハウトマンの来訪時は、ポルトガル、スペインに後れて当地へ来たということで、できるだけ地域の勢力と友好関係を結び、先行二国の間をぬって商業上の利益をえようとしていたオランダであったが、200年の時の経過の中で主客を転倒させ、今や、バンテン、マタラム両国で二分してきたジャワ（島）を含む、インドネシア地方を支配することになっていたのである。

そこには、同地に割拠していた勢力が、目先の利益に惑わされたことと、オランダの巧みな経略がそれをさせたといえる。当初は、現地勢力を尊重して彼らに有利と思われるような協定を結んだのだが、時を経るに従い、それはオランダに利益をもたらすものと変容していった。時に、恫喝もあったが、気がついたらオランダの思う壺に嵌まっており、あまつさえ、その領土をもオランダに譲ろうという気にさせられていたということである。

その手口はまさに「商人国オランダ」といえるだろう⁽³³⁾。

一方の現地勢力は、互いに牽制しあいながら目先の利益を追求するあまり、進出してきたヨーロッパ列強との離合集散を繰り返し、それは、やがて、オランダ一国に集約されることになり、そして、オランダの支配を受けることになるという結果になってしまったのである。

インドネシア地方と一口でいっても、その地理的範囲は広く、また、その属する民族も多種多様であり、それが故に、これを統合し、一致団結してオランダを含む、同地へは新参者としてやって来たヨーロッパ列強の少数の者達を駆逐することができず、それぞれか、その足下に屈してしまうということになってしまったのである。

そして、これは、更に、その後の国家による植民地化によって一層助長され、そのため、その苛斂誅求を待つことになるのである。

こうした多民族国家であるが故の大同団結の難しさは、独立後のインドネシア共和国においても同様で、「パンチャシラ」Panca Silaという民族統一の柱を設けてはいるが、ティモールTimor島の問題、2000年から2001年にかけてスラウェシを中心に行ったイスラム教徒とキリスト教徒との対立、2004年のスマトラ島沖地震のために現在は鳴りをひそめているアチューの独立問題、はたまた、独立の英雄スカルノAhamed Soekarno大統領（1901-70）を失脚させたクーデターの際の彼と共産党との結びつき、そこには中国系の人間が多かったとして彼らの多くが殺されたということがあった等、難しい問題を今日も抱えている。

こうした民族統一の難しさといった点を巧みについた中でオランダの支配が展開されたの

である。拙稿では、そうしたオランダの支配の前半部、東インド会社とジャワの動向を中心にバリ（島）との関わりについて考察を試みてみたわけである。

付記

オランダの20世紀における統治の一端として、バリ（島）での現存者ウダヤナ大学教授ドクター・アグンおよび、オカ・シラダナダ氏、オカ氏の叔父アグン氏からの聞きとり調査でえた話の一部について記す。

1906年、オランダはバリ（島）北部、ブレレン Buleleng 王国のシンガラジャ Singaradja へジャワから進出、そこを中心に島内に8つある王国、中でも、王（国）の中の王（国）としてみられていたクルンクン Klungkung の王ブラマン・マデを始めとした各王と協定を結び、バリ（島）を統治、シンガラジャには最高統治者としてのレジデン Resident（理事官と訳される）を置き、その下に、アシスタント・レジデンがシンガラジャとデンパサール Denpasar（バドゥン王国）に駐在し、彼らの下に各王国毎にコントリエールがいてそれぞれの王国を約10人のオランダ人と共に統治していた。

そして、バリ（島）全土で8つある王国の各王の下にある統治機構を通してレジデンの指示がバリ（島）の各地へ伝えられるのである。

オカ・シラダナダ OKA SIRAGNADA 氏の幼少期、タバナン Tabanan 王国の都タバナンには約20人のオランダ人がいた。

一方で、オランダ人は各地に、「住民の学校」という意味の5年制の学校（小学校）をつくり、これをそれぞれの王に譲り、管理をまかせる。

オカ家のあるクランビタン Kerambitan では1926年に学校がつくられ、この地方の長官 Pungawa だったオカ氏の父親に与えられ、それは今日でも使われている。それまではクランビタンには学校はなかった。

そして、オカ氏自身先生はバリ人だったその学校へ3年生まで通い、その後はデンパサールの学校へ移る。

バドゥン王国の都デンパサールと、クルンクン王国の都クルンクンにはオランダ人の先生がおり、オカ氏もデンパサールでそうした先生に教わる。

スカルノ大統領の父親もシンガラジャで先生をやっていたという。

オカ氏の叔父アグン氏の父も音楽を主とした先生だった。

注

- (1) Linschoten *Intinerario, voyage ofte schipvaert naer Oost ofte Port ugaels Indien*. 1596 Amsterdam 岩生成一訳・注 渋沢元則訳 中村孝志訳・注『リンスホーテン 東方案内記』大航海時代叢書 VIII 岩波書店 1973 573頁
- (2) 生田滋訳・注 池上岑夫訳 加藤栄一訳・注 長岡新次郎訳・注『トメ・ピレス 東方諸国記』大航海時代叢書 V 岩波書店 1973 の邦訳がある。
- (3) 永積昭『オランダ東インド会社』講談社 学術文庫 2000 62頁
- (4) 永積 同上書 62頁 スペインの「無敵艦隊」(アルマダ Armada) の敗北はオランダとの協同作戦があったからで、「スペイン艦隊は張り子の虎で、スペイン恐怖説は打ち砕かれて、諸国はこぞって安堵した影響の方がスペインにとって大損害だっただろう」田口一夫『ニシンが築いた国オランダ一海の技術史を読む』成山堂書店 平成14 176頁という国潮の中での彼の航海であり、「マルバラ海岸のものより上質の胡椒香料を直接入手したいがためであった」(浅田実『商業革命と東インド貿易』法律文化社 1989 80頁)と指摘される航海だった。
- (5) 永積 同上書 44頁
- (6) G. P. Rouffaer & J. W. IJzerman (Vitag. entoeg.): *De Eerste Schipvaart der Nederlanders naar Oost-*

Indië onder Cornelis de Houtman, 1595-1597, I, Den Haag, 1915 (Werken uitgegeven door de Linschoten-Vereeniging, VII).

・J. Keuning (utig. tn toeg.): *De Tweede Schipvaart der Nedelanders naar Oost-Indië onder Jacob Cornelisz. van Neck en Wybrant Warwijck. 1595-1600. III, Den Haag, 1942 (Werken uitgegeven door de Linschoten-Vereeniging, XLVI).* 渋沢元則, 生田滋訳・注『ハウトマン, ファン・ネック 東インド諸島への航海』大航海時代叢書 第Ⅱ期 10 岩波書店 1993 290頁

- (7) 1597年末, アムステルダムに「新航海会社」Nieuwe Compagnie Vaerteが設立され, これが先述の「遠国会社」と合併した。「旧会社」Oude Compagnieと呼ばれるのがこれである。永積 前掲書
- (8) 永積 前掲書 64頁
- (9) 永積 同上書 64頁
- (10) 永積 同上書 64頁
- (11) 河部利夫『東南アジア』河出書房新社 昭49 216頁
- (12) オランダ東インド会社の資本金は約650万グルデンといわれた。イギリス東インド会社の第一回航海のための起債が6万8,000ポンドであったが, これをかりに1609年頃の率(1ポンド・スターリング=約7・9グルデン)で換算すれば, 約53万グルデンということになり, オランダの会社の10分の1にも足りない額である。(永積 前掲書 67頁)
- (13) 河部 前掲書 217頁
- (14) 永積 前掲書 70頁 ネーデルランドでは15世紀末から16世紀の初めにかけてアントウエルベン Antwerpen (アントワープ Antwerp) はヨーロッパ経済の上昇気運に乗って, 一気に「世界市場」への地位へ駆け昇っていったが, 17世紀に入るとともに, 世界経済はオランダの時代となり, その中心地はアムステルダムになっており, こうした事情を反映しているといえる。中沢勝三『アントウエルベン国際商業の世界』同文館 平成5 57, 235頁
- (15) 永積 同上書 68頁
- (16) 桜井由躬雄 石澤良昭 桐山昇『東南アジア』朝日新聞社 1997 126頁
- (17) 岩生成一「オランダ・イギリス両国人の初期探検航海とその研究資料」『大航海時代 概説年表 索引』大航海時代叢書 別巻 岩波書店 1973 188頁
- (18) 永積 前掲書 72頁 「アジア水域に行ってみると, VOCは正面攻撃する力を欠いていることがはっきりした。アジアのポルトガル勢力は少なかったが, アジア人の利害とうまく調整が進んでおり, 撃退することはきわめて困難だった。そこでVOCは最初の選択を捨て, 並行システムをつくりあげるという方針に転換した」(Curtin, P. D., *Cross-Cultural Trade in World History* 田村愛理, 中堂幸政, 山影 進訳『異文化間交易の歴史』NTT出版 2002 214頁)と指摘もなされる。
- (19) 岩生 前掲論文 191頁
- (20) 岩生 前掲論文 193～4頁
- (21) 永積氏はこの辺りの事情について, 「この頃イギリスは香料諸島においてますます優勢になり, 1616年にはバンダ諸島の一つであるルン島 (Pulau Run) を占領し, 両国船々は出会うと互いに砲火を交えるほどの緊迫した情勢となった。また西部ジャワにおいてもオランダを凌ぐ勢力を示したので, オランダは次第にバンテンからジャカルタに移り, 永久的根拠地を築くことを考えるようになった」といっている。前掲書 93頁 イギリスの進出が著しくはあったが, 「この会社の非の打ちどころのない商業組織は, 株式の売買に完璧な合法性と現実性を得させつつ, 会社には並はずれた利益の実現というものを可能にした。取引の良好な年には, 12%を下ることなく, 50%に達することすらあった。1696年に連邦政府がこの会社の特許権を更新した際には, 会社側はかなりの資産を蓄えており, 800万フロリンの年間納付金を約定したのである」(Guyot, L., 'Les Épices' 池崎一郎, 平山弓月, 八木尚子訳『香辛料の世界史』白水社 1997 47頁)といわれる力を保持していた。
- (22) 岩生 前掲論文
- (23) 弘末雅士『東南アジアの港市世界』岩波書店 2004

- (24) ハウトマン 前掲『東インドへの航海記』 110頁
- (25) ハウトマン 前掲訳書 518頁 (解説)
- (26) ハウトマン 同上書 519-20頁 (解説)
- (27) ハウトマン 同上書 516頁 (解説)
- (28) ハウトマン 同上書 521頁 (解説)
- (29) ハウトマン 同上書 166頁
- (30) 弘末 前掲書 52頁。1619年アジア貿易の根拠地バタヴィアを建設した年、モルッカ諸島における香料貿易の割合をオランダが3分の2、イギリスが3分の1とする協定を結んだ(宮崎正勝『海からの世界史』角川選書 平成17 182頁)「しかし当時オランダ東インド総督であったクーンは、この条約の履行を極力拒み、事毎にイギリスを妨害したので両国の対立は1623年のアンボンでの衝突において頂点に達した」(永積 昭「東南アジアの植民地-インドネシアの場合」荒松 雄他編『岩波講座 世界歴史』16 岩波 1974 358頁)
- (31) 弘末 同上書 100頁
- (32) 永積 前掲書 201頁
- (33) 「オランダ人は有能な商人だった。しかし、利のないところは見向きもせず、地理的探検にもあまり関心を示さなかった」(増田義郎『太平洋-開かれた海の歴史』集英社 2004 87頁)

Research Note**The Social Climate and Linage in Bali**

Masamichi MATSUBARA

Last time, I tried to write about Portugese expansion over the world with the trading and the mission to expand Christianity, especially for South-east Asia.

In this time, I tried to write about Dutch's expansion to South-east Asia.

Dutch people had the interesting for the profit of trading, especially, spice trading.

So, they wanted to have a relation with this area's powers peacefully.

But, there were many European countries people in these area, then, they struggled each other for the profit of trading together with native powers.

After the struggles, Dutch people established their power in Indonesia area, and then, they ruled this area for about 400 years as ruler.

So, this essay was pesuited that Dutch rule in this area.